

美人社長

里帆二十六歳

第一卷 女社長を襲う驚愕のクレーム

海老沢 薫

内 容

■ 著作権について

■ ま え が き

■ 第一章 女社長に降りかかった災難

■ 第二章 土下座で謝罪する女社長

■ 海老沢薫 B L O G

■ 海老沢薫 Web連載小説

■ 著作権について

「美人社長 里帆二十六歳 第一巻 女社長
を襲う驚愕のクレーム」(以下本書と表記す
る)の著作権は「海老沢薫」にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、
及び国際条約によつて保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもつて許可し
た場合を除き、本書の一部、または全部を、

あらゆるデータ蓄積手段(印刷物、電子フア
イル、ビデオ、テープレコーダー)により複

製、流用、転載、転売することを固く禁じま
す。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第
61条などの罰則がありますのでご注意ください

い。

■ まえがき

神山里帆は小さな人材派遣会社を經營する二十六歳の若手実業家だった。大学生時代に起業してからわずか数年で、里帆の会社は急成長を果たし、その容姿端麗な外見と相まって里帆は注目の若手美人社長としてテレビや雑誌などのメディアに取り上げられる機会も多かった。

そんな順風満帆な起業家人生を歩んでいた里帆であつたが、ある朝、思いがけないトラブルに巻き込まれてしまう。経営者として初めて直面する困難な事態に、里帆は社長としての責任と会社の将来のために、羞恥を堪えた大胆な行動に出る。

しかしそれは、美人社長の人生を大きく狂わせていく選択になるのだつた。取引先に会社と自らの恥ずかしい弱みを握られてしまつた美人社長は、その後、屈辱的な取引の数々を持ちかけられ、それに応じていくしかなくなつた。

クライアントの前で羞恥のプレゼン、自らの会社の社員の見ている前で屈辱の土下座、公衆の面前で晒す恥辱のセールス。
里帆は社長としてのプライドだけでなく、一人の女性としてのプライドまでを打ち砕かれながら、自らの会社を守り抜くために、その美しい体を張って全力で困難に立ち向かう。

■ 第一章 女社長に降りかかった災難

朝の通勤ラッシュのせいなのか、電車の中は大勢の乗客で犇めき合っていた。普段、こんな時間に電車に乗る事のない里帆は、たった三駅先の駅に到着するまでの僅かな時間さえどうしようもない苦痛に感じられた。電車が途中の駅に到着する度に、乗客の大きな入れ替えが起こり、里帆はその度に満員の車内からホームへと押し出された。その隙に腕時計を確かめると時計はすでに午前九時を十分ほど過ぎていた。

里帆の携帯に問題の電話が入ったのは今からおよそ三十分ほど前のことだった。

「一体どうなっているんだ、約束した人材が来ないじゃないか」

電話の向こう側で怒鳴る男性の声はとても高圧的な口調で一方的に里帆を責めた。とりあえず謝罪をした里帆は、状況を確認してから

折り返しますと言って丁寧に電話を切った後、
スマホに登録されているリストからある女性
の番号を確認すると急いで電話したのだった
「すみません、別の用事が入ったんでキャン
セルさせていただきますー」
電話越しに聞こえてくる女性の声はあまりに
も軽いノリで、里帆が何か言おうとするとい
方的に電話を切り、もうそれから何度かけて
も繋がることはなかった。

神山里帆は、株式会社ファビュラスという
小さな人材派遣会社を経営している二十六歳
の女性実業家であつた。今から五年前の大学
生時代に起業した里帆は、持ち前の行動力と
鋭い知性で順調に業績を積み上げ、僅か十名
足らずの社員でありながら、中小企業や個人
商店などをクライアント先として年間数百名
の人材を取り扱う企業へと成長させていた。
そして、容姿端麗な里帆は、その経営する
会社の成長と相まってテレビや雑誌などのメ

ディアドでも、次代を担う若手女社長として何
度か取り上げられた事もあり、SNS上など
では里帆のファンのコミュニティまで生まれ
るほどの人気があった。
そんな順風満帆な起業家人生を歩んできた
里帆にとって今朝突然携帯に掛つてきた電話
は、まさに青天の霹靂といふべき初めて遭遇
するトラブルだった。
今朝、クライアント企業の新商品販売のプ
ロモーション活動に当たり、里帆の会社は女
性スタッフ一名を今日と明日の二日間派遣す
ることになっていたので。クライアントから
事前に二十代のスタイルの良いモデルのよう
な女性を派遣して欲しいという依頼を受けて
いた里帆は、自社に派遣登録しているスタッ
フの中から該当する女性を選び出し、彼女に
電話連絡して勤務内容等について伝え、二日
前に本人の承諾をもらつていたので。
ところが今朝、その女性スタッフは約束の
時間に勤務場所に現れず、クライアントから

クレームの電話が社長である里帆の携帯に直
接入り、里帆が急いで女性スタッフに連絡を
したところ、彼女はあっけらかんと仕事をド
タキャンしたのだ。
里帆はすぐにクライアントに電話を折り返
し、ひたすら謝罪の言葉を伝えたが、クライ
アントからはとにかく代わりの人材をすぐに
よこして欲しいと強く要請され、あまりに急
なことで代替人員を見つける事ができなかつ
た里帆は、社長である自分自身が謝罪も兼ね
て一人の派遣スタッフとして赴くことに決め
たのだった。
朝、自宅でクレームの電話を受けた里帆は
事情を他の社員達にメールで伝えると、急い
で電車に乗って現場に向かった。現場は駅か
ら歩いてすぐの場所にある大型スーパーで、
クライアント企業が夏に向けて新発売する清
涼飲料水のプロモーション活動の一つがそこ
で行われることになっていた。
電車が駅に到着すると里帆は全力で現場ま

で走り、クレームを受けてからおよそ五十分後に電話を掛けてきた担当者の前に辿り着いた。
「株式会社ファビュラスの社長の神山です」
里帆は息を切らしながら、担当者の中年男性に挨拶をした。
「まったくアナタの会社はどうなってるんですか！」
四十代後半くらいの担当者の男性はイライラした様子で片脚で地面を叩き続けながら待ち構えていた。
「本当に申し訳ありません。弊社の方で手違いがありました。」
里帆は深々と頭を下げ、謝罪の言葉を伝えた。
「アナタ、美人社長とか騒がれて調子に乗ってるんじゃないか！」
「そんなことはないです・・・」
里帆は頭を下げたまま告げた。
「美人社長さんは、そんな謝り方しかできないんですか、もっと誠意ある謝罪を見せて下さい。」

さいよー

担当者の男は、目の前で自分に向かつて頭を下げる美人に対して自分が圧倒的に優位な立場にある事を自覚すると、執拗に責め続けた。

「私、どうすれば？」

僅かに里帆は顔を上げると担当者の男に問い掛けた。

「そうだな、とりあえずここで土下座してくださいよ。それが誠意つてもんじゃないですよ」

かー

担当者の男は、困惑した表情を浮かべる里帆の美しい顔を見下ろしながらそう告げたのだ

った。

「・・・」

里帆は思いがけない要求に言葉を失ってしま

った。

■ 第二章 土下座で謝罪する女社長

里帆は社長になってから、これまで仕事上で
の小さなトラブルには何度か見舞われた事
があり、そうした時に取引相手に対して謝罪
する場面は経験していたが、さすがに土下座
までしたことはなかった。それに学生時代か
ら優等生としての道を歩んできた里帆は、こ
れまでの人生においても土下座など経験した
ことはなかったのだ。なんで土下座までしな
きゃいけないの。里帆は心の中で葛藤
していた。しかし、目の前に立つクライアン
トの様子を見ていると、ここで社長である自
分が土下座して謝罪しなければ、到底事態が
前に進まないように感じられたのだった。
「できないんですか？ それなら今後、御社と
の取引は一切お断りしますの、どうぞサッ
サとお引き取り下さい」
担当者の男は、そう吐き捨てるように言う

里帆の前から立ち去ろうとした。
「待って下さい！」
里穂は立ち去る男の背中に向かって叫んだ。
ここで今、目の前にいるクライアントとの取引がなくなってしまうえば、里帆の会社が受け取るダメージは計り知れなかったのだ。だから何としても誠意を見せて謝罪の意を受け入れてもらうしかなかった。
そして里帆は社長としての覚悟を決めると大型スーパールの前のアスファルトの上に正座し、両手を地面に付けると改めて謝罪の言葉を伝えたのだった。
「この度は、御社にご迷惑をお掛けして大変申し訳ございませんでした」
里帆はそう言うのと、頭を地面に向けて下げていった。
担当者の男は、若い美人社長の土下座姿を腕組みしながら暫し優越感に浸って眺めていた。プレイベートではおそらく絶対に交わる事のできないだろう超絶な美人が、自分の前

に屈する姿は男の妄想を膨らませた。できる
事なら、こんな美人を徹底的に甚振ってやり
たい、担当者のおもいきり恥ずかしがる姿を見てみた
い、担当者の男は胸の奥で湧き上がる興奮を抑
えながら、事務的な口調で土下座する美人
社長に告げた。
「アナタの誠意は良く分かりました。それで
代わりのスタッフはどこなんですか？さっさと
ここに連れてきて下さい」
「そ、それは・・・私にやらせてください」
里帆は顔を上げると、担当者の男を見上げな
がら強い眼差しで訴えかけた。
者の男は、思わず若い美人社長の放つ女性と
しての魔力に心を揺さぶられてドキツとした。
「社長のアナタが代わりに働くっていうんで
すか？」
担当者のおもいきり恥ずかしがる姿を見てみた
度で里帆に尋ねた。
「はい、私が今日と明日の二日間、御社のた

めに働かせて頂きます」
里帆はアスファルトの上に正座したまま訴え
かけた。
担当者の男は、カッチリしたスーツ姿の里
帆の体を上から下まで舐めまわすように見つ
め、暫し何かを考え込んでいた。今回、新商
品のプロモーション活動にあたり依頼した女
性のイメージ像に、里帆はまさに最適か、あ
るいはそれ以上の存在だった。その美貌は勿
論の事、スーツの上からでも分かるほどの胸
の膨らみや魅惑的な腰の曲線、形の良なお尻
スラッと伸びた脚、それらはどれも文句のつ
けようがなかった。
こんな超絶な美人なら幾ら払ってでも良い
から働かせたい、そして担当者の男は、さっ
き抱いた自らの妄想がもしかしたら叶えられ
るかも知れないと思った。
「仕方ないですね、分かりました。それなら
社長のアナタでお願いします」
担当者の男は、胸の奥で渦巻く興奮を悟られ

ないように無愛想な振舞いを見せたまま、美
人社長の申し出を受け入れた。
「ありがとうございます、御社のために精一
杯働かせて頂きますので、どうぞ宜しくお願
いいたします」
里帆はもう一度、土下座の姿勢で深々と頭を
下げたのだった。
そうして急遽、一人のスタッフとしてクラ
イアントの現場で二日間働く事になった社長
の里帆は、開店前の大型スーパーの店内に入
り、従業員専用の控え室のような場所に案内
された。
「それでは、これが今日から二日間、ここ
働く時のユニフォームになるので着替えてく
ださい」
担当者の男は紙袋を持って控え室に戻って来
ると、その中に入った黄色い蛍光色の布切れ
のようなものを取り出し、目の前のテーブル
の上に置いた。

「えっ」
それを見た里帆は思わず小さな声を漏らした。
クライアントの担当者の男がテーブルの上
に置いたのは、なんとビキニの水着だったの
だ。
「これを着るんですか？」
里帆が驚いた様子で問い掛けると、担当者の
男は平然とした態度で頷いた。
「それではこの後、仕事内容に関する諸々の
説明があるので、着替え終わったらすぐに飲
料水売り場まで来てください」
担当者の男はそう言うのと、困惑した表情を浮
かべる里帆を残して、控室を出ていった。
一人になった里帆は、目の前のテーブルに
置かれたビキニを手に取り、それをマジマジ
と見つめた。するとそれは想像していたより
も乳房や股間やお尻を覆う面積が小さく、ビ
キニボトムはサイドを紐で結ぶあまりに露出
度の激しい破廉恥きわまりないものであるこ
とが分かった。

こんな水着を着なくちゃいけないなんて・
・。里帆はプライベートでも絶対に着ない
ようなセクシーな水着を前にして羞恥に体を
激しく震わせた。
しかし、小さいながらも社員を抱える会社
の社長として、会社と社員を守るために覚悟
を決めるしかなかったのだ。

■ 海老沢薫 B L O G

・ ・ ・ 海老沢薫の最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

■ 海老沢薫 Web 連載小説

『 清楚な美人妻 彩 27 歳 絵画モデル編 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 国民のペットへと堕ちていくヒロイン ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802>

『 清純派女優 結衣 24 歳 ー 女神の憂鬱 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675>

『 女教師 玲奈 25 歳 ー 女性教諭の前代未聞の不幸事 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186>

『 美人社長 里帆 26 歳 ー 若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約 ー 』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885>